Publisher's Review
パブリッシャーズ・レビュー
●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●

msz みすず書房の本棚
［無料送付］
No. 8　2013 秋　（表示価格は消費税込です）
113-0033 東京都文京区本郷5-32-21　tel. 03-3814-0131　http://www.msz.co.jp

〈サードプレイス〉の提唱者

マイク・モラスキー

米国内のスターバックスでは、ソファを置いている支店は少なくない。思えば、チェーンの飲食店にしてはかなり異様な発想である。まず、ソファには二、三人しか座れないのに、店内の面積をかなり占有するので効率が悪いはずだ。また、すでに知らない客がひとり座っていると、いくら共有されるフリースペースであれ、なかなか腰をかける気が起きないだろう。距離だけの問題ではない。仮に隣り合わせのテーブルで同じくらい離れて座っていたら気にならないのに、ソファだから遠慮したくなる。そもそもソファというのは家でくつろぐための家具であり、営利目的の公共空間ではどうしても場違いの感がする。

言うまでもなく、そのように公的／私的、そして営利的／非営利的空間の差異を曖昧にすることこそ、スターバックスのしたたかな営業作戦だと理解できる。店なのに、いわゆる「アットホーム」な雰囲気を醸し出す、ソファのような効率主義に反する家具を置くことで逆説的に効果を上げるわけである。

あるいは、アメリカでのスターバックスの成功を理解するのに、エドワード・ホッパーの代表作《ナイトホークス》を思い起こせばよい。ホッパーはアメリカの荒涼とした社会風景、そして孤独な人々の姿を描くことで知られているが、《ナイトホークス》では、深夜の"diner"が描かれている。そして一九四〇年代当時のアメリカでは、"diner"は"coffeeshop"とほぼ類義語として使われていたことに留意したい。つまり、このような殺風景な飲食空間がアメリカの喫茶店「文化」を代表するからこそ、スターバックスがアメリカ社会で革新的な存在と見なされたわけである。

レイ・オルデンバーグの『サードプレイス』では、アメリカのこういった荒涼とした都市空間および乏しい飲食文化に焦点を当てながら、学ぶべき反例としてヨーロッパや第二次大戦以前のアメリカで見られる地元に根付いた、小ぢんまりした人間中心の社交の場を挙げている。そのような場を総じて"The Third Place"と呼んでいるのである。

"third place"は都市社会学に由来する概念で、日本語では〈第三の場〉や〈第三空間〉と訳される。オルデンバーグは〈第一の場〉を家（家庭）、〈第二の場〉を職場（労働環境）とし、その間にあって中立的、匿名の人としても楽しく過ごせる地元の集いの場のことを〈第三の場〉と呼んでいる。とりたてて行く必要はないが、常連客にとって非常に居心地がよく、それゆえに行きたくなるような場所。

会員制にはなっておらず、予約などするような場所でもない。いつでもひとりでふらっと立ち寄って、店主やほかの常連客に歓迎される。そして帰りたいと思ったら、いつでも帰ればよい。その意味では、家庭とも職場とも著しく違う。ただし、家庭とは異なるものの、「アットホーム」な気持ちでいられることが〈第三の場〉の大きな魅力である。スターバックスもそれに気づいていたわけである。

しかし、オルデンバーグはそのようないわば「演出された」場所ではなく、地元社会に深く根付いている有機的な場所のみがサードプレイスになりうると論じている。射程はあくまでもアメリカ社会にあり、とくに車・郊外化・ショッピングモールやチェーン店などがもたらした多くの社会問題に対してきわめて批判的である。それこそホッパーが描いてきたアメリカを連想させられる（ただし、オルデンバーグは戦後の郊外生活の普及に問題の要因を見出しており、「古き良き時代」を前提としているが、ホッパーはそのようなロマンチシズムやノスタルジーを一切感じさせない、さらに冷徹な目でアメリカを描いている）。

オルデンバーグは社会学者だが、本書は決して硬い学術書ではない。むしろ、一般読者向けに書かれており、行間から著者自身の感情がよく伝わってくる。三部構成の第一部では、〈サードプレイス〉という概念を多視点から紹介しているが、単なる抽象論に陥ることはない。第二部ではフランスのカフェや、イギリスのパブなど、六つの事例に一章ずつ割き、〈サードプレイス〉の機能や貢献をより具体的に検証している。第三部では、アメリカにおける〈サードプレイス〉の欠如が、どのような社会問題を生み出しているかについて考察しながら、解決の糸口を探っている。

残念ながら数々の事例において、オルデンバーグは欧米以外の社会にほとんど言及していない。それにもかかわらず、現在の日本の都市空間の変容ぶりを把握するのに示唆的な洞察が散在している。まず、〈サードプレイス〉という概念は、いまの日本の日常生活を考える上でどれほどの有用性をもつか、何が見えてくるか。言い換えれば、バブル経済以降日本が直面している諸問題はどれほど、そして具体的にどのようにアメリカ社会と共通しており、日本には独自の〈サードプレイス〉がいまも存在しているのだろうか。本書では直接触れられていないのに、読みながら日本社会およびその飲食文化を見直すように促されてしまう。

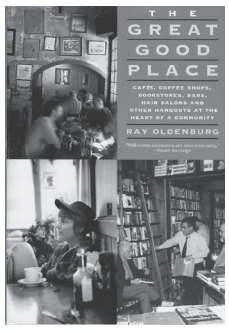
（Michael Molasky　日本文化研究・音楽社会学　一橋大学教授）

居酒屋、カフェ、本屋、図書館…インフォーマルな公共空間

レイ・オルデンバーグ
《サードプレイス》
忠平美幸訳

日本でも、都市再開発、建築、空間デザイン、マーケティングの分野で活用されている〈サードプレイス〉の概念は、本書を通して広まった。

個人の生活は、第一に家庭、第二に報酬を伴う生産的な場、第三にコミュニティ、の三つの場所に支えられているときバランスがとれている。本書の著者で都市社会学者のオルデンバーグが、高度経済成長――ショッピングモール式の商店街、自動車依存型の郊外住宅、娯楽としての消費生活――を経たアメリカの社会と人々の孤独の問題を批評しつつ、人間らしい生活を取り戻すための「第三の場所（サードプレイス）」として着目するのは、人々が気楽に集まりくつろげる「とびきり居心地のよい場所（The Great Good Place）」（原書タイトル）、ずばり地元の飲食店だ。



〈サードプレイス〉の特徴を紹介しよう。一、自由に出入りでき、誰も接待役を引き受けずに済む、〈中立の領域〉である。一、地位や身分、年齢にかかわらず誰でも受け入れる〈平等化の機能〉をもつ。一、〈会話が主な活動〉で人柄の魅力や雰囲気こそがものをいう。一、いつ訪れても〈常連〉がいて、新参者と常連の交流が店に活力を与えている。一、〈地味で慎ましい外観〉etc.。社会学の知見を生かした実感を伴う洞察は、読んで頷かずにはいられない。

〈サードプレイス〉と文化や政治の関係も論じられる。活気のある都市には、必ず独特の雰囲気を放つ飲食店がある。その国の文化風土を醸成する場と言っても過言ではない。そして見知らぬ人と会話を交わすその「インフォーマルな公共空間」では民主主義の精神が育まれている。

社会が成熟期を迎えた日本の社会において、そして大震災の後、私たちは身近な人や地域社会とのつながりを再び意識するようになっている。コミュニティと場所、地元と自分の関係について考えさせる一書だ。［都市論／建築／商業デザイン／マーケティング］【十月下旬刊】
（四六判・480頁・予価四二〇〇円）

博士号のいらない宇宙探査

ティモシー・フェリス
《スターゲイザー　アマチュア天体観測家が拓く宇宙》
桃井緑美子訳　渡部潤一監修

手作りの望遠鏡が世界観を揺るがしたガリレオの時代もいまは昔。冷戦以降の宇宙探査は莫大な研究費を投じておこなわれるようになり、宇宙の新発見は選ばれたプロ集団だけが利用できる巨大望遠鏡や宇宙望遠鏡の専売特許のようにも見える。しかし、本当にそうなのだろうか？

新刊の『スターゲイザー』は、自前の望遠鏡を用いて宇宙を探るアマチュア天文家（スターゲイザー）たちの知的冒険を語る、科学読み物の珠玉作。太陽系内の惑星を中心にさまざまな天体の科学像を巡りながら、その解明に貢献した幾多のアマチュア観測家の仕事ぶりに光を当てる。インターネットやCCDカメラの登場以降、アマチュアの観測活動の重要性が増しているという。独創的な観測術をもつ在野の天体家たちへのインタビューも興味深い。

天体観測の素晴らしさを、天文ファンではない人にまで伝えることに成功している本書のような本は、じつは数少ない。スターゲイザーたちに誘い込まれるようにして読者は、きっと自分の目でも星を眺めたくなるだろう。「こちらもいつまでも読んでいたくなるような、素敵な本だった」。（森山和道氏、『日経サイエンス』書評）

本書に基づいて制作され、アメリカPBSネットワークでTV放映された科学ドキュメンタリーDVD（60分、日本語字幕）付。［宇宙・天文］（四六判・464頁・三九九〇円）

高校図書館の今、そして問題点

成田康子《高校図書館　司書の現場から》

司書のキャリア三〇年という著者が、北海道の三つの高校での経験を熱く語る好レポート――日々の模索、発見、具体的な活動と収穫、抱負。

大人になる一歩手前の高校生にとって、司書のニーズは切実だ――個々の生徒の事情に耳を傾け、彼らの希望や探究心と館内の蔵書・資料をつなげ、さらに、授業内容にかんして教師たちと図書館をつなげる仕事も。しかし現実には、開いていない図書館や、司書が常駐していない図書館もあり、「学校司書」はいまだに法的な裏付けさえない。

『出版ニュース』の長期連載を一冊にまとめる。高校図書館の現状、抱える問題点もすべてわかる。息の長い基本図書になるだろう。

［図書館論］【十一月中旬刊】（四六224頁・予価二三一〇円）

音楽と記憶の問題をめぐって

小泉恭子《メモリースケープ「あの頃」を呼び起こす音楽》

青春時代に聴いた音楽は、どのように心に残るのか？音楽はなぜ「あの頃」を思い出させるのか？　若い日に聴いた音楽を第二の人生のよりどころとする人びとを、九州から東北まで追った。

うたごえバスと東京の音風景、フォーク酒場でギターを弾くオジさん、コミュニティFMでDJをする戦前生まれと団塊世代、映画のサントラコレクター、などなど。メモリースケープという有効な概念を駆使して、論じ、語る。

綿密な調査・取材にもとづいた、音楽の記憶と個人史をめぐる語りには深く引き込まれる。こんなに様々な想いと音楽体験があったのだ。

［音楽・社会学］【十月中旬刊】（四六264頁・予価三三六〇円）

亡命作家が描く真実

A・シニャフスキー　沼野充義訳《ソヴィエト文明の基礎》

本書はペレストロイカの時期にフランスで刊行、ソヴィエト崩壊後、その真の姿の全体を鮮やかな筆致で描いた書として長く読み継がれている。ソ連に生まれ育ち、逮捕・投獄・亡命という経緯をへてきた作家のみが描くことのできるリアルな描写は、驚きの連続である。革命／実現したユートピア／レーニンの学者国家／スターリンの教会国家／新しい人間／ソヴィエト的日常／ソヴィエト的言語／民族問題の全8章。［ソヴィエト問題・現代史］【十一月上旬刊】（四六432頁・予価五六七〇円）

人間的な歴史を求めて

J・ルカーチ　村井章子訳　近藤和彦監修《歴史学の将来》

二一世紀の今日、歴史学の研究と教育はどうなっているのか？　答えは本書にある。

近世に成立した専門の歴史学は、学科・教科として、出版の一分野として、大衆の歴史ブームにも乗り、小説と競合しながら拡大深化を遂げてきた。ところがこの数十年で本来の文学的強みを失い、未曾有の危機に見舞われている。歴史学に未来はあるのか。

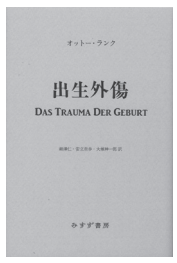
カー『歴史とは何か』の流れを汲む本書は、八七歳の著者が全身全霊で執筆した歴史哲学にして、教養人の面目躍如たる痛快エッセイ。［歴史学・学問論］【十一月上旬刊】（四六192頁・予価三三六〇円）

早期母子関係論の先駆け

オットー・ランク　細澤・安立・大塚訳《出生外傷》

精神分析の歴史において、オットー・ランクの名は〈逸脱者〉として記憶されている。精神分析の開祖フロイトは、神経症的あるいは精神病的な不安の根源を「エディプスコンプレクス」に見出した。しかしランクは一九二四年に発表した本書で、不安の根源は「出生時の外傷まで遡る」と主張したのである。

正統的精神分析の歴史のなかで語られることのなかったランクの主著にして今日の早期母子関係論の先駆けともいえる重要古典が、いま明らかになる。［心理・精神医学］（四六判・288頁・四二〇〇円）



ニューヒストリシズムの最新の成果

S・グリーンブラット　高田茂樹訳《シェイクスピアの自由》

ニューヒストリシズムの騎手たるグリーンブラットによる久しぶりの本格的論考。シェイクスピアに関する彼の議論の多くが個別の作品を論じていたのに対して、本書は彼の作品全体に流れる精神の有り様を捉えようとしている。エリザベス朝の絶対主義的な強制力は自由への足枷になると同時に、シェイクスピアの芸術成立、自由探求の条件にもなっている。また彼はしみも個性もない理想美に反して醜悪やグロテスクなものにも美を見出している。現代有数の歴史家と偉大な劇作家との時代を超えた〈文化と主体〉をめぐる対話。【十月上旬刊】

［文学評論・新歴史主義］（四六306頁・予価四四一〇円）

東南アジア奥地の国家なき民族誌

J・C・スコット　佐藤仁監訳　今村真央他訳《ゾミア　脱国家の世界史》

インドシナ半島奥地に広がる熱帯の高地、ゾミア。急峻な谷が外部からの侵入を阻むこの地域には、モン、アカ、チン、カレンといった少数民族が独自の文化を築いてきた。彼らはなぜこの辺鄙な山中に定着したのだろうか？

アメリカを代表する政治学者であり人類学者でもある著者スコットは、彼らの生業・文化は《国家からの逃避》を目指した結果だ、という大胆な仮説を展開する。平野の稲作国家による束縛を嫌って、焼畑、口承民話、親族関係といった文化装置を発達させてきたというのだ。後進的とみられてきた少数民族の文化に権力からの自律戦略を見いだし、東南アジアだけでなく全世界の事例を壮大なスケールで描いた、脱国家のグローバル・ヒストリー。

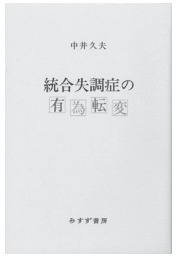
［世界史・人類学］【十月上旬刊】（A5456頁・予価六三〇〇円）

精神科医の私がしてきたこと

中井久夫《統合失調症の有為転変》

〈「今晩眠れなかったら明日おいで、眠れたらせっかくの眠りがもったいないから明後日でもよいけれど」「これは少量だから、効いたら君の病気は軽いんだ。効き足りなければ少量だからまだまだ増やせる。他に似た働きの薬もたくさんある」「病気ですから治療します。統合失調症の可能性ですか？　そうならないように努力します」「治療して何か残るか、みます」。私のやり方は患者と話し合いながら共同の実験を積み重ねてゆくやり方です。〉

一九六六年に精神科医となって以来、統合失調症を中心に、グラフと年表を作ることの効用、絵画療法の意味、外来治療のあり方など、著者のやってきたこと・見てきたこと・考えたことを懇切にしるし、さらに日本を軸に精神医学の歴史を追跡しながら、これからを展望する。精神医学と医療にたずさわるすべての人のために。［精神医学］（四六判・328頁・三三六〇円）



図書館関連の好評既刊書

宮田昇『図書館に通う―当世「公立無料貸本屋」事情』（一三二〇円・本面下に広告）

辻由美『読書教育―フランスの活気ある現場から』（一五二〇円）

A・アンニョリ『知の広場―図書館と自由』　萱野有美訳（一九四〇円）

▼中井久夫・既刊書より

『徴候・記憶・外傷』（三九九〇円）『最終講義――分裂病私見』（二一〇〇円）『臨床瑣談』（一八九〇円）『臨床瑣談・続』（一九九五円）『西欧精神医学背景史』（二三一〇円）『サリヴァン、アメリカの精神科医』（三一五〇円）

みすず書房新刊

（2013・4～8）

東京・文京・本郷5　TEL03-3814-0131（価格は税込です）

四つの小さなパン切れ
オランデール＝ラフォン　アウシュヴィッツを生きのびたその後の人生。死者の記憶と共に伝える、生の輝き。高橋啓訳　二九四〇円

消えた国　追われた人々
東プロシアの旅　池内紀　国が消えるとはどういう事態か。カントの生誕の国からヒトラーの砦へ、過去を尋ね、未来を探る紀行記の名品。二九四〇円

さまよう魂がめぐりあうとき
チェン　好評『ティエンイの物語』のフランス作家が、始皇帝暗殺をめぐる男女三人の愛を歌う感動の詩小説。辻由美訳　二九四〇円

図書館に通う
当世「公立無料貸本屋」事情　富田昇　出版界で生きてきた著者が、今度は本好きの一市民として発見した街の図書館の変貌、本と人を繋ぐ豊富な逸話。二三一〇円

「昭和」を送る
中井久夫　臨床経験を描いた4篇はじめ、昭和天皇逝去にあたって書いた表題作、いじめについてなど久々のエッセイ集。三一五〇円

官僚ピープス氏の生活と意見
岡照雄　王政復古にペストやロンドン大火まで。十七世紀英国の激動を自在に生きた能吏の言行を描くナラティヴの傑作。三九九〇円

アーツ・アンド・クラフツ運動
ネイラー　いかに実用品に「美」を盛り込むか。プレモダニズム期最大の工芸デザイン運動の全貌。川端康雄・菅靖子訳　五〇四〇円

「全体の科学」のために
笠原嘉臨床論集　こころが脳科学によって説明されつつある今日、こころの専門家に求められる「全体の科学」の視点とは。シリーズ完結。三九九〇円

認識問題　3
近代の哲学と科学における　カッシーラー　本巻はフィヒテ、シェリング、ヘーゲル、ショーペンハウアー他。大哲学史5冊完結。須田・宮武・村岡訳　八四〇〇円

映像の歴史哲学
多木浩二　『オリンピア』『プロヴォーク』からベンヤミンまで。著者の思想の精髄をうつす映像文化論講義。今福龍太編　二九四〇円

プライバシーの新理論
概念と法の再考　ソローヴ　法律、哲学、心理学、社会学による概念を批判的に検討。多様な視角から最新の理論を提示する。大谷卓史訳　四八三〇円

ストロベリー・デイズ
日系アメリカ人強制収容の記憶　ナイワート　一九四二年、強制収容は行われた。理不尽な偏見と差別に誇りを持ち挑んだ日系人の記録。ラッセル秀子訳　四二〇〇円

エイズの起源
ペパン　アフリカ植民地、医療、貧困、そして売血と売春。ウイルス誕生とパンデミックの謎を解く決定版。山本太郎訳　四二〇〇円

奇跡――ミラクル　詩集
長田弘　物言わぬものらの声が言葉となり記された、静かにゆっくりと読みたい三〇篇。新境地をひらく、詩人の代表作。一八九〇円

医師は最善を尽くしているか
医療現場の常識を変えた11のエピソード　ガワンデ　手洗いの徹底で院内感染はゼロにできるか？　現役外科医が人間の豊かな発想力と可能性を描く。原井宏明訳　三三六〇円

死後に生きる者たち
〈オーストリアの終焉〉前後のウィーン展望　カッチャーリ　帝国の没落、故郷からの離別。〈生体の死後〉を生きた芸術家たちへの哀悼劇。上村忠男訳　田中純解説　四二〇〇円

食べられないために
逃げる虫、だます虫、戦う虫　ウォルドバウアー　奇想天外な護身術を繰り出す昆虫と、出し抜こうとする捕食者。その驚異の生態に迫る。中里京子訳　三五七〇円

ミシンと日本の近代
消費者の創出　ゴードン　シンガーミシンの席巻、モンペを生んだ大戦、60年代の中流意識の膨張。消費者側からの歴史。大島かおり訳　三五七〇円

〈大人の本棚〉
こわれがめ　付・異曲　クライスト　初演から二百年、新たな読みの可能性を広げ、豊かに展開してきた古びることのない古典喜劇。山下純照訳　二九四〇円

〈大人の本棚〉
草の葉　初版　ホイットマン　アメリカ詩の始まりを告げる世紀の傑作、コンパクトな初版（一八五五年）による初の訳詩集。富山英俊訳　二九四〇円

〈始まりの本〉
ベンヤミン／アドルノ往復書簡　上・下　ナチの迫るなか「共同で哲学する運命」を生きた二人の軌跡、著作成立の過程。最高の哲学的ドキュメント。野村修訳　各三七八〇円

〈始まりの本〉
ケアへのまなざし　神谷美恵子　病む人を個性ある一人の人間として見る。エッセイ、論文を新編集で。単行本未収録対談付。外口玉子解説　三一五〇円

デジタル・メディア論の金字塔

レフ・マノヴィッチ
《ニューメディアの言語
デジタル時代のアート、デザイン、映画》
堀 潤之訳

一九九〇年代以降、デジタル・テクノロジーの急速な普及によって、文化は未曾有の変容を遂げた。これははたして、印刷術の発明に匹敵するような、文化の根本的な転換なのか？　それとも、これまでのメディア史の延長線上にある現象にすぎないのか？

ニューメディアの理論家・批評家でありプログラマー、メディアアーティストでもあるマノヴィッチは、「ニューメディア」を19世紀前半以来のコンピュータ計算と各種メディア・テクノロジーの二つの歴史が収斂する場と規定する。デジタル・データとしてコンピュータによって操作される新しいメディア・カルチャーを視覚文化の歴史のなかに位置づけ、映画理論、芸術史、文学理論、コンピュータサイエンスの知見を活用しながら詳細に検討してゆく。

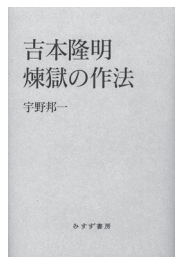
また、固有のかたちをもたないニューメディアと旧来の諸メディア（絵画、写真、映画など）の間の関連性と差異を描出しつつ、同時にマノヴィッチが着目するのは、ニューメディアがいま実際に取っている姿が、従来のメディア、とりわけ映画の慣習に多くを負っている、ということだ。

アヴァンギャルド映画、ハリウッド映画からウェブサイトやソフトウェア・アプリケーション、アニメーション、コンピュータゲームやメディアアートのデザインに至るまで、メディア史における重要な作品やソフトを例示しながら、詳細に「ニューメディアの言語」の構造を分析する本書は、それまで文化史・社会史も視野に入れた包括的な分析がなされなかったデジタル時代のメディアについて、初めて本格的に論じた分野のランドマークである。研究者のみならず、アーティストやデザイナー、電子書籍や3D映画（ゴダールは新作を3Dで撮っている！）に関心を寄せる人たちに多くのヒントをもたらすだろう。

（A5判・488頁・五六七〇円）

「戦後最大の批評家」を再考する

宇野邦一《吉本隆明 煉獄の作法》



「逝去の知らせに接してから、しきりに考えつづけている。休火山のように、私のなかで眠りについていたモチーフがあったようだ。それが呼び覚まされ、もう一度新たに吉本隆明を読む時間が始まった」。吉本隆明とは何者だったのか。いまもなお受けとるべきその問いとモチーフは何か。「関係の絶対性」「大衆の原像」から「自己表出」「共同幻想」「心的現象」を経て母型論、ハイ・イメージ論へ。「戦・後の断絶」を真摯に生きた詩人批評家の軌跡をたどり、自在にジャンルを越境するブリコラージュ群をあざやかに読みといた思想地図。

［現代思想］（四六判・272頁・三一五〇円）

初の同時通訳から見る現代史

F・ガイバ《ニュルンベルク裁判の通訳》
武田珂代子訳

ニュルンベルクの通訳を研究した唯一の本。同時通訳のしくみ、通訳者の履歴・役割、通訳史における意義を精確に解く。現代史と通訳翻訳問題に関心のある読者を引き込むだろう。今までと異なる角度からの情報があり貴重である。

訳者解説は東京裁判、旧ユーゴ戦犯裁判との比較分析を行う。特に、通訳が審理に与える影響、心理的ストレスなどに論及。国際裁判における通訳の意味と重要性を説く。

［現代史・通訳翻訳］【十月下旬刊】（四六280頁・予価四四一〇円）

どう語られ、記憶されるべきか

R・イーグルストン《ホロコーストとポストモダン》
田尻芳樹・太田進訳

ホロコーストはどう語られ、記憶されるべきか？ 人類史上最悪のこの出来事は歴史学、文学、哲学を一変させ、その衝撃は今なお続く。生き残った人の証言、ホロコーストを題材にした小説、歴史修正主義。それらを「読む」とは、どのような営為だろうか。

レーヴィ、ヴィーゼル、レヴィナス、デリダ、アガンベン等、膨大なホロコースト表象を網羅して鮮やかに解読、直接体験していない大量死の記憶をいかに継承するかを問う。［現代史］【十月中旬刊】（四六592頁・予価六六一五円）

▼イーグルストン来日　九月中旬、東大駒場にて講演予定。

小さな町から見える民の歴史

エヴァ・ホフマン《シュテットル ポーランド・ユダヤ人の世界》
小原雅俊訳

第二次大戦前のポーランドに三百万人いたユダヤ人は、今では一万人もいない。「屋根の上のバイオリン弾き」に描かれた東欧のシュテットル（ユダヤ人集落）はホロコーストによって消滅した。ポーランドの町ブランスクは人口の半分以上がユダヤ人だったが全員去った。

この町に生まれ育った若い世代の郷土史家がヘブライ語を学び、墓碑や古文書を解読して再現した小さな町の歴史と、十三歳で故国を離れ移民として英語圏で生きざるをえなかった著者によるポーランド・ユダヤ人の壮烈な歴史。二つの歴史が綾なし、民族共存がもたらす可能性と葛藤、記憶と担い手を失った歴史のもたらす悲惨を描く。

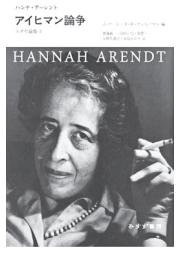
『記憶を和解のために』でホロコーストの生存者である両親の下に育つ経験を綴った著者は十月に初来日する。【十一月中旬刊】［歴史・現代思想］（四六336頁・予価五〇四〇円）

アイヒマンにいたる道程

H・アーレント コーン／フェルドマン編
山田・大島・齋藤他訳《反ユダヤ主義／アイヒマン論争 ユダヤ論集1・2》

みずからを「自覚的パーリア」として位置づけることによって思考し、理解しようとした二十世紀を代表する政治哲学者の、ユダヤ関係について書かれたものを全2巻で集成。1巻には『全体主義の起原』に連なる長大な論考「反ユダヤ主義」を中心に、フランスでの収容所生活時代の文章、一九四一年アメリカ亡命後、『アウフバウ』紙に書き連ねた第二次世界大戦やパレスチナ問題についての論考を収録、2巻には「パーリアとしてのユダヤ人」「シオニズム再考」など高名な論文を筆頭に、一九六〇年代前半、『イェルサレムのアイヒマン』刊行後の大バッシングのさなかに書かれた「G・ショーレムへの書簡」ほかアイヒマン関係の重要文書を収める。［思想史］【九月下旬刊】（A5総912頁・各六七二〇円）

▼本面下に既刊・映画紹介

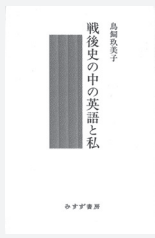


月刊雑誌《みすず》最近号より

ナオミ・クライン「もう黙ってはいられない」／酒井啓子「砂漠で待つバラと、片思いの行方」／［新連載］野口雅弘「ボン便り」（七月号）。パウル・ティリヒ「ハイデガーとヤスパース」／森川すいめい「自分のペースで住むということ」／鈴木正「『日本哲学全書』のこと」（八月号）。宮沢昭男「日本のクラシック音楽におけるガラパゴス」／明田川融「核兵器と「国民の特殊な感情」」／酒井啓子「アラブ知識人の自負と闇」（九月号）。連載は中村健之介、保坂和志、原武史、小沢信男、大谷卓史、外岡秀俊、池内紀、佐々木幹郎、上村忠男、植田実ほか　（各三一五円）

書評コラム

管啓次郎
鳥飼玖美子《戦後史の中の英語と私》を読む



一九六九年、アポロ11号月面着陸。「同時通訳」が脚光を浴びた。七〇年、大阪万博。外国一般に対する関心が高まり、その風は小学生にも吹いた。ぼくは六年生、にわかに英語好きになった。同世代の人にはわかってもらえると思うが、オジサン的イメージの強かった同時通訳者の中にひとり素敵な大学生くらいのお姉さんがいて、彼女はわれわれの女神、アイドル、はるかな目標だった。鳥飼玖美子さんだ。

本書は鳥飼さんの本格的な回想記。英語との出会い、大学二年生から始めた通訳の仕事、大学での英語教育への転身、理論的研究と、キャリアの全体をふりかえりながら、時代と社会をつらぬく大きな力を彼女は考えようとする。自分の人生の流れに背後から作用したものは何か。かつて『通訳者と戦後日米外交』でパイオニア同時通訳者五名を論じた彼女は、先輩たちに行ったオーラル・ヒストリー（口述史）的インタビューを自分自身に対して試みたのだともいえるだろう。

赤坂檜町で生まれ育つ。小学校低学年のころ、近所の外国人少女に話しかけたくてたまらない。母親から言い方を教わり「ワッチャーネーム？」「ベッキー」。英語による初めてのやりとりだ。高校生のとき、アメリカに留学。公民権運動とビートルズの時代、ケネディ大統領暗殺にもぶつかる。大学に入学し、やがて同時通訳の訓練を受けはじめる。すぐに国際会議を経験、テレビ番組の準レギュラー。ぼくらが記憶する若き鳥飼さんの活躍が、こうしてはじまった。

国際社会にとって英語とは何か。日本語で暮らすわれわれに英語は何を教えるのか。二言語間の往還運動によってみずからを鍛えてきたトップ・アスリートのような彼女が、滑り台が怖くて滑れない、走ればいつもビリの子だったところを想像するのは楽しい。でもいつも言葉にこだわって生きてきた。その精神の凛とした強さが、この本からはそのまま伝わってくる。

（すが・けいじろう　詩人・比較文学者）＊読売新聞6月24日掲載の書評を転載。

『イェルサレムのアイヒマン』刊行から50年。いま、新たに読まれる

ハンナ・アーレント

イェルサレムのアイヒマン
——悪の陳腐さについての報告　3990円

全体主義の起原
1 反ユダヤ主義　4725円
2 帝国主義　3 全体主義　各5040円

ラーエル・ファルンハーゲン
——ドイツ・ロマン派のあるユダヤ女性の伝記　6300円

過去と未来の間
——政治思想への8試論　5040円

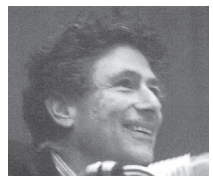
E・ヤング＝ブルーエル　矢野久美子訳
なぜアーレントが重要なのか　3990円

アウグスティヌスの愛の概念
《始まりの本》　3150円

暴力について——共和国の危機
《みすずライブラリー》　3150円

マルガレーテ・フォン・トロッタ監督が10年の構想を経て映画化。『ハンナ・アーレント』10月26日（土）より岩波ホールほか、全国順次ロードショー！

没後10年——エドワード・サイード



二〇〇三年九月二六日、帰らぬ人となったサイード。パレスチナのために「虐げられた民が達成するかもしれない歴史的な勝利の証言として」残された文章群。そして、刺激に満ちた音楽評論。20世紀を代表する思想家の仕事。

文化と帝国主義（全2巻）
1 五一四五円　2 四八三〇円

故国喪失についての省察（全2巻）
1 四七二五円　2 五四六〇円

オスロからイラクへ
戦争とプロパガンダ2000-2003　四七二五円

パレスチナ問題　四七二五円

バレンボイム／サイード 音楽と社会　グゼリミアン編　二九四〇円

サイード音楽評論
D・バレンボイム序文（全2巻）　各三三六〇円

エドワード・サイード 対話は続く　ホミ・バーバ他編　四五一五円

遠い場所の記憶　自伝　四五一五円

〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21
tel. 03-3814-0131 fax 03-3818-6435
みすず書房
http://www.msz.co.jp（価格は税込です）
ニュースレター配信中．ウェブサイトよりお申し込みください

生態系が奏でる音楽

バーニー・クラウス
《野生のオーケストラが聴こえる
サウンドスケープ生態学と音楽の起源》
伊達 淳訳

「自然界の音楽とはどんなものか、クラウスの仕事が教えてくれる」（ピート・シーガー）

クラウスは過去四〇年のあいだ世界中の自然環境を訪ね、刻々と失われ続ける貴重な自然の音を録音保存してきた。本書では、生き物と自然環境が生みだす素晴らしい音響とその意味を、音の風景全体（サウンドスケープ）に注目する独自の手法で明らかにしている。彼自身の感動がすべてのページから伝わってくるみずみずしい筆致に、本を開いた瞬間から引き込まれる。

野生生物のコーラスは実は、オーケストラのように編成されているという。その不思議についても著者は生態学的「ニッチ」の観点から考察。人間の音楽もそうした野生の音響編成との関係性の中で進化したという、人類学的にも興味深い仮説を提示する。

ではなぜ、人間の音楽は野生の音楽から遠く離れてしまったのか。いまや人間のつくる音は生態系の音の調和に対する暴力となりはてた。自然の音楽との関係を再建する道はあるのだろうか。終章の冒頭、ボサノヴァの創始者アントニオ・カルロス・ジョビンが、自身を育てた熱帯の森の見る影もない現状を嘆きながら、鳥の声をみごとに声帯模写してみせるエピソードが象徴的だ。環境音への私たちの認識を一変させる書。必読。

【十月下旬刊】［環境・生態学］（四六336頁・予価三五七〇円）

バーニー・クラウス

『野生のオーケストラが聴こえる』は、著者の語る自然の音風景をインターネット経由で聴くことができる仕様になっています。書籍中の案内に従って、パソコンやスマートフォンを使って全部で65の素晴らしいサウンドスケープをご堪能いただけます。書籍と音声を組み合わせる新たな試みにご期待ください。

自然の音風景をインターネットで

■音風景の例
氷河が移動する音／多雨林の夜明けのコーラス／健全なサンゴ礁とストレスを受けたサンゴ礁／環境音と調和するバヤカ族の歌唱／スキアシガエルのコーラスを軍用機が抑圧する／他

なぜ「数字は正しい」のか

T・M・ポーター《数値と客観性
科学と社会における信頼の獲得》
藤垣裕子

星や分子を数えるだけでなく、社会の事象がどうして数値化されるようになったのか。ギリスピーとクーンに学んだ科学史家が、イギリスの保険数理士、フランスの技術官僚、アメリカ陸軍技術団の例に即し徹底追求。翻って科学にとっての数値化を問う。ローカルな知識を越える標準化の意味。専門家の判断が不信の目に晒されるとき。科学技術社会論をリードする訳者の明快な解題付。［科学論・科学史・統計］【九月下旬刊】（A5判・400頁・六三〇〇円）

ナチュラリストはどう理解してきたか

M・J・S・ラドウィック《化石の意味
古生物学史挿話》
萱谷暁・風間敏訳

ナチュラリストは化石をどのようなものとして理解してきたか。古生物学者としての蓄積、時代背景、宗教・哲学の領域まで幅広い視野を持つ著者が一次資料を通して生物の進化と絶滅、神と自然、地球の歴史、人類の誕生などの解釈の歴史を描く。一九七二年の初版以来読み継がれる古生物学史・地質学史の基本文献であり科学史の面白さを知る上で必読の書。図版多数。

［科学史・地質学・生物学］（A5判・384頁・五六七〇円）

ヤマト中心史観の外で

大田静男《夕凪（ゆーどぅりぃ）の島
八重山歴史文化誌》

石垣島から沖縄本島まで四百キロ、台湾まで二七〇キロ。先史時代の八重山は縄文・弥生の文化圏の外、人々はヤドカリの穴から生まれたという神話をもつ。琉球王府、中国の冊封体制、薩摩藩、幕藩体制と、八重山は何重も支配を生き、明治の琉球処分により近代日本の一部となった。

八重山を「日本」や「沖縄」と安易に同一視はできない。尖閣問題で揺れるなか、国防の最前線などにされてはたまらない。八重山には八重山の視座がある。

石垣島に生れ育った著者が、本土中心の歴史には収まらない驚きの時空世界を独創的発想と島伝来の知識で掘り起こす。［歴史・現代社会］（四六判・292頁・三七八〇円）

大人の本棚

渡辺隆次《山里に描き暮らす》

八ケ岳山麓にアトリエを構えて36年。『きのこの絵本』などエッセイでも人気の絵描きが書き下ろす、自らの来し方行く末。八王子での空襲体験と戦後、美術界で無所属の誇り（と苦労）、リゾートブームの狂乱、そして変わらぬ（変わった？）自然の美しさ厳しさ。インドアライフ本。［エッセイ］（四六判・232頁・二九四〇円）

▼新潟で渡辺隆次個展「山里に広がる生命の宇宙」（10月10日～11月4日・角田山妙光寺客殿）新作小品展（10月12～20日・新潟絵屋／10月22～30日・北書店）。詳細は小社HP。

山と関わりつづける生き方

高桑信一《山と渓に遊んで》

登山界に沢登りの愉しさをひろく伝え、また消えゆく古道や山里の暮らしを追った民俗紀行でも揺るぎない文業を重ねてきた著者の半生記。団塊の世代、男鹿半島の港町で生まれ育ち、秋田工業高校を卒業後就職して埼玉へ。地元の山岳会で出会ったアルピニズム。一ノ倉沢で仲間の遭難死。自ら浦和浪漫山岳会を興し、リーダーとして会を率いる試行錯誤と心得。早期退職でNTTを辞め、フリーランスとなって取材にガイドに山野を駆けまわる日々。一貫してユニークな活動、そして陰翳に富んだ文章から、山と関わりつづける生き方の典型をこの一冊に刻む。【十月上旬刊】（四六328頁・予価二九四〇円）

みすず書房
近刊のお知らせ
11-12月の刊行書から

ヴェニスの商人の異人論　西尾哲夫
精神分析とは何か
　松木邦裕・藤山直樹・細澤 仁
デモクラシーの生と死　上・下
　J.キーン　森本醇訳
意味としての心　北山 修
寝そべる建築　鈴木了二
精神療法家と読書　成田善弘
万物は流転する
　V.グロスマン　齋藤紘一訳
見知らぬ友人――経済の人類史
　P.シーブライト　山形浩生訳
英語化する世界と世界化する英語
　H.ヒッチングズ　田中京子訳
ロックファミリーツリー
　P.フレイム　瀬川・新井訳

（http://www.msz.co.jp にもご案内）

みすず書房 営業部だより

ー『**辺境から眺める**』の著者**テッサ・モーリス＝鈴木**氏が福岡アジア文化賞学術研究賞を受賞。先日、記念の講演会が福岡にて開催されました。

ー『**すぎされない過去**』『**われがたい光景**』などの著作がある**井出孫六**氏が、長野県下の文化、社会、教育などの分野で活躍する個人・団体に贈られる信濃毎日賞を受賞。作品に授与される賞も同時に受賞されました。

ー**ペーター・ツムトア**『**建築を考える**』のブックデザインで、**葛西薫**氏が本年度ADC賞を受賞されました。ADC賞は、過去一年間に発表されたポスター、新聞・雑誌広告、テレビコマーシャルなど多様なジャンルから選定される最高峰の賞とされています。また同時に、東京TDC賞2013（ブックデザイン部門）も受賞されました。**ツムトア**『**建築を考える　特装版**』（限定300部）は残部僅少です。どうぞお早めにお求めください。

ー**エルンスト・カッシーラー**『**認識問題**』全四巻五冊が完結しました。

ー多くのご要望をいただき、**エトムント・フッサール**『**イデーン**』を復刊、全三巻五冊が揃いました。

みすず書房・最近の重版より

「昭和」を送る　中井久夫	¥3150
消えた国 追われた人々――東プロシアの旅　池内 紀	¥2940
四つの小さなパン切れ　M.オランデール＝ラフォン　高橋啓訳	¥2940
図書館に通う――当世「公立無料貸本屋」事情　宮田 昇	¥2310
白い人びと――ほか短篇とエッセー《大人の本棚》　F.バーネット　中村妙子訳	¥2940
ロールシャッハテストの体験的基礎　E.G.シャハテル　空井健三・上芝功博訳	¥7140
フェミニズムの政治学―ケアの倫理をグローバル社会へ　岡野八代	¥4410
他者の苦しみへの責任　クラインマン他 坂川雅子訳 池澤夏樹解説	¥3570
エイズの起源　J.ペパン　山本太郎訳	¥4200
建築を考える　P.ツムトア　鈴木仁子訳	¥3360

みすず カレンダー 2014 のお知らせ

二〇一四年版は「馬のいる風景」をお届けします。来年の干支は馬。古今東西の絵画、写真、民芸品のなかに描かれた馬を集めました。しばらくつづいた足踏み状態の気分から、今年は跳躍、よい一年となりますように、という想いも込めました。カレンダーはハガキ大、ペーパーケース入、卓上用です。ご希望の方は一部六〇〇円（税込）と送料八〇円、計六八〇円分の切手を同封のうえ、みすず書房（〒113-0033 文京区本郷5-32-21）までお申し込みください。複数のご購入については営業部（03-3814-0131）までお問い合わせください。書店店頭でもご注文いただけます。（十月中旬発売予定）